『三田市史』第５巻近代資料Ⅰ（巻頭写真）

日露戦争従軍兵士の書簡貼り交ぜ屏風（明治 38 年）

三田市所蔵

（左端「明治三十八年九月念五 米谷傳次郎調製」。右端「征露出征忠墨義筆」。）

○この屏風はもともと三田天満神社に所蔵されていたもので、日露戦争の軍事郵便が一面に貼られています。

屏風の左端にある日付（明治３８年９月２５日）から、戦争終結を機に作製されたことがわかります。ここでは特に、三田天満神社の当時の社司（米谷傳次郎氏）が作製したところに資料の面白さがあります。

屏風の軍事郵便は、差出人の名前から三田天満神社の氏子であった出征兵士が、社司に書き送ったものだと分かります。中でも特に多いのが、社司米谷傳次郎が戦地の兵士（氏子）に贈った三田天満神社のお守りに対する礼状です。お守りについて兵士（氏子）は「出征中尤（ママ）も必要を感し居た品」などと記しており、実戦という日々死と隣り合わせの緊張状態で神との関係がより密接なものとなったこと、また文字通り日露戦争で人々はこれらの神とともに戦ったことが分かります。よって「征露」という形での戦争終結は神による加護を強調することとなり、軍事郵便は神威を立証するものとなったと思われます。

また文字とともに、軍事郵便に印刷された写真や絵が多く配置されているのもこの屏風の特徴ですが、中でも陸軍恤兵部が作製した神殿と烏の絵入り便箋は計３点と、最も多い重複がみられます。もしかするとこれも屏風の作製意図と関わってのことかもしれません。このようにこの屏風には、日露戦争における兵士と神とのつながりが色濃く投影されています。

（三田市総務課市史編さん担当）